

中国残留孤児の重い言葉

● 放眼日中

7月初め、中国の友人が主催した写真展「国境を越えた人間愛―中国

残留日本人孤児の物語」の開幕式に参加した。今年は終戦70周年の年、マスコミ各社もこの写真展に注目し、取材にやって来ていた。孤児の代表者がインタビューに応じていたが、日本人の記者には一生懸命に日本語で、そして中国人記者に対しては流暢な中国語で、ハッキリと思いを語っているのがとても印象的だった。

会場に展示されていた多くの写真を懐かしそうに眺めている孤児たちの中には、やはり何かを思い出して、目頭を押さえている人の姿も見られた。そんな中、中国人記者から「養父母に育ててもらって感謝しているとは何度も聞いていますが、実際にはいじめられ、過酷な労働を強いられ、人もいたのではないのか」と、少々

辛辣な質問が飛び、周囲がちよつと緊張した。

それに対して「中国帰国者・日中友好の会」の代表、池田澄江さんが「確かに殴られたり、罵られたりした孤児もいました。苦しい生活を強いられた人も多かったです。でもそれも全部、全部含めて、育ててもらったんですよ。だから、だからこそ、戦争はもう二度としないでほしいんです」と若干、声を詰まらせながら回答すると、あたりは一瞬静まり返り、それ以上この件で質問する者はいなかった。実に重い言葉であり、不覚にも涙がこぼれてしまった。実は戦後の混乱期、中国の大地には残留孤児だけでなく、すでに成人に達し、中国人に嫁いだ残留婦人も多数存在していた。その残留婦人を主人公にした映画に主演し、プロデューサーも手掛けた女性が開幕式の

挨拶で、なぜこの映画を作ろうと思ったのかを語った。

「中国で残留夫人を訪ねた時『私たちのことを忘れないでいてくれてありがとう』と嬉しそうに言われたことが映画を作るきっかけです。なぜなら私たちは『忘れていなかった』のではなく、『知らなかった』のですから」。この言葉もズシリと胸に突き刺さった。

残留孤児、夫人とも、その後の中国の歴史の中で翻弄され、日本人だといっただけで更に辛い目に遭った方も多かったはずだ。筆者が上海に留学した1980年代半ば、国交回復後の残留孤児の肉親捜しが始まっており、日本では大きな反響があったが、同時に中国内では「残留孤児だと言えど日本へ行ける。小遣いももらえる」などという言葉を何度か聞いた。

当時の日本はそれほど憧れの国であつたが、帰国を果たした人々も日本語がうまく話せない、その子や孫がなかなか職に就けないなど、多くの問題が指摘されており、彼らの戦いは戦後70年、未だに終わっていないように見受けられた。

写真展後、孤児50人は中国のハルビンや北京を訪問、養父母たちとの再会を果たすと同時に、人民大会堂では李源潮国家副主席とも面談したという。

日中両国間は様々な問題を抱えているが、厳然たる事実として、戦争により遺棄された日本人が少なからずいたことをもう一度、思い出す最後の機会かもしれない。そして、そのような事態が再度起こる可能性のある方向を目指すのかどうか、お互い真剣に考える必要があると痛感させられた。



コラムニスト・アジアソウオッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。